

「乳用牛の飼育過程（ホルスタインの場合）」の解説



種付けと分娩

日本の酪農経営での乳牛の種付けは、ほとんどが人工授精*によって行われています。母牛は受胎後、約 280 日の妊娠期間を経て子牛を分娩します。分娩は 30 分～40 分で終了し、生まれた子牛は 30 分も経たないうちにひとりで立ち上がろうとします。

*人工授精：メス牛が妊娠しやすいときに合わせて人工的に種付けすること。



哺育

生まれた子牛は、子牛専用の飼育場所（カーフハッチという専門の小屋の場合もある）で、母牛とは隔離されて飼育されます。

分娩直後の母牛の乳は「初乳」と呼ばれ、免疫付与効果もある大切なものです。乳は人間の哺乳瓶と同じような形をした容器など専用の容器で与えられます。

メス牛から出る乳を搾り、牛乳を出荷することが酪農経営の仕事ですから、オス子牛は経営内では飼育されません。（乳肉一貫経営という経営形態もありますが、これは酪農専業経営とは区分されます。）オス子牛は、概ね 1 ヶ月ほど飼育された後に、肉用として出荷されます。

メス子牛は、次の世代の母牛として自分の牧場に残す場合と、その必要がない場合は出荷される場合があります。



育成

子牛は生後 1 ヶ月齢程度で離乳されます。

その後、生後 13 ヶ月齢～16 ヶ月齢で初めての種付けをし、分娩するまでの牛を育成牛と呼びます。

この期間は健康な母牛になるための重要な期間であるため、共同の牧場（育成牧場）でまとめて飼育される場合もあります。育成牛の飼育は健康管理などに手間がかかるので、専門の牧場に預けることで農家の労働負担を軽くすることにもなります。

こうして飼育された育成牛は、生後 23 ヶ月齢～26 ヶ月齢で初めての分娩を迎えます。

以上は、自分の農場で子牛が生まれ、その子牛を母牛にするまでの過程ですが、北海道などで育てられた育成牛を購入する場合があります。

この場合は、購入する前に種付けが終了し妊娠が確認された牛を購入することになります。こうして導入された牛は導入後 1 ヶ月程度で分娩します。



搾乳

分娩したメス牛は、乳を出すようになります。(メス牛でも分娩しないと乳は出ません。)

1回の分娩で搾乳(乳を出す)できる期間は、280日～360日間です。この間は毎日搾乳できますが、期間を通じて毎日同じ量の乳が出るわけではありません。搾り始めてから、2～3ヶ月頃がもっとも多くの乳を出す期間になり、その後は順次減っていきます。

また、産歴によっても期間内の総乳量は異なります。一般的には初産の場合が一番少なく、4産目5産目までは総乳量が増えていきます。これは1分娩毎に母牛の体重が増え大きくなることもその要因のひとつです。5産目以降は、総乳量は減少傾向に向かいます。

1日当たりで搾れる乳の量は、平均すれば30kg程度ですが、多い時期には40kgもの乳量になります。



種付け

上記のように搾乳期間は、平均すれば300日前後の期間ですが、この期間を過ぎてから、次の分娩に向けて種付けをしては、乳を搾れない期間が長くなり効率的ではありません。

このことから、分娩後60日程度で次の分娩のための種付けをすることになります。



乾乳

搾乳を始めてから300日前後が過ぎてくると、毎日搾れる乳の量も減ってきます。

次の分娩のためにも搾乳を中止して60日程度は乳を搾らないようにします。これを乾乳(かんにゅう)といい、乾乳中の牛を乾乳牛と呼びます。

こうして次の分娩に備えます。

分娩⇒搾乳開始⇒種付け⇒乾乳(搾乳終了)⇒次回の分娩というこの周期は、12ヶ月間から15ヶ月間で繰り返されます。

牛本来の平均寿命は12年程度ですが、効率よく乳を生産するためには、上記のサイクルを5回程度繰り返し約5年～6年程度で搾乳牛としての役割を終えます。

※三重県内の酪農経営農家戸数等、畜産経営の統計数値は「三重の畜産広場」内[三重の畜産統計](#)に掲載のとおりです。

*文中の数値等は平均的なものであり、飼育方法等により異なります。